

邪馬台国の時代⑥  
 ～末盧国と西海の島々～

河村哲夫

壱岐から末盧国へ

帯方郡の使者たちは、狗邪韓国(金海)・対馬・壱岐と船で南下し、壱岐南端の印通寺あたりから、末盧国の呼子(唐津市呼子町)をめざしたであろう。直線で約 25 キロメートル。

行程	水行	里数	実際の距離	1里の距離	備考
帯方郡→狗邪韓国	7日	7,000里	約 700 km	100m	海州から金海まで
狗邪韓国→対馬	1日	1,000里	約 62 km	62m	金海→対馬北端
対馬→壱岐	1日	1,000里	約 52 km	52m	対馬南端→壱岐北端
壱岐→末盧	1日	1,000里	約 25 km	25m	壱岐南端→呼子
計	10日	10,000里	約 840 km	84m	



古代人にとって、壱岐から呼子(佐賀県)をめざすのが、最も安全で、最短のコースであった。

壱岐から約 15 キロ南には、馬渡島・松島・加唐島・小川島が東西に並んでおり、万が一の場合には、それらの島々に避難することもできる。

神功皇后の朝鮮出兵のコースも、【糸島→神集島→呼子→馬渡島→壱岐→対馬】という伝承である。

【宗像→大島→沖ノ島→対馬→朝鮮】という航路を、『日本書紀』は「海北道中」と呼んでいるようであるから、このコースは「海西道中」と呼んでいいかもしれない。

倭人の水先案内を受けた帯方郡の使者たちは、そのコースをたどっている。

呼子は東松浦半島の北端にあり、加部(かべ)島が北の出口に位置し、あたかも壁のようになって呼子港を北西の季節風からさえぎってくれる。まさに天然の良港である。

加部島には田島神社があり、宗像三女神が祭られている。田島は宗像大社の所在する字名の田島に由来する。宗像の海人族との強い結びつきが感じられるが、そのことについては、神功皇后の朝鮮出兵や遣唐使などの関連で、別の機会に触れることになろう。



すでに述べたように、卑弥呼が派遣した第一回目の使節団は、正始元年(240)6月ごろ帯方郡に帰着した。

そして、魏の皇帝から直接卑弥呼に授与すべしとされた詔書・「親魏倭王」の金印・金・帛(はく)・

錦(きん)・罽(けい)・毛織物)・刀・鏡・采物(さいぶつ)・飾り物)などのおびただしい下賜品を運ぶため、帯方郡太守の弓遵(きゅうじゆん)は、部下の建中校尉梯儻(ていしゆん)らを倭国へ派遣した。

梯儻がどのような船でどの程度の人員を率いて倭国に向かったのか、『魏志倭人伝』には何も記されていないが、季節が7月ごろであったらしいことについては、すでに述べた。『魏志倭人伝』にも、「草木茂り盛(さか)えて、行くに前人見えず」と書かれている。

梯儻以下の帯方郡の使者たちは、歴史上、中国が公式に派遣した初めての使節団でもある。したがって、彼らには倭国に関する情報収集の任務もあたえられていたはずである。

団長の梯儻以下は、皇帝の下賜品を守って、そのまま船に乗って海上を進んだであろうが、一部の者は下船し、倭人の道案内を受け、陸路をたどって末盧国に向かったであろう。

『魏志倭人伝』の末盧国の条の「草木茂り盛えて、行くに前人見えず」という記事は、呼子から末盧国の中心部まで陸路を歩いた帯方郡の役人たちの実体験に基づいているのは明らかである。

彼らは、【呼子→大友→湊→相賀→佐志】というコースをたどったであろう。



このコースは、神功皇后の経路として『肥前国風土記』などにも記されており、大友遺跡などにみられるように、古い時代から開けていた地域である。呼子から佐志まで約 13 キロの道のりで、現在の国道 382 号線の沿線地域でもある。

末盧(まつろ)国という国名は、現在の松浦郡や松浦川などに引き継がれている。遺跡の分布からみて、現在の唐津市中心部に末盧国の都があったとみていい。

『魏志倭人伝』は、

「(壱岐から)また一つの海を渡り、千余里にして末盧国に至る。四千余戸有り。山海に浜(ひん)して居(す)む。草木茂り盛えて、行くに前人見えず。魚・鰻(ふく)・アワビを捕らうることを好み、水は深淺となく、皆、沈没して之を取る。東南に陸行すること五百里にして、伊都国に到る」

と記しているが、この記事からいくつかのことが明らかとなる。


### (1) 人口は四千余戸余り

四千余戸とされているから、壱岐よりも千戸ほど多く、一戸当たり5人家族で計算すれば2万人程度の人口になろう。

国名	戸数
邪馬台国	可7万余戸
投馬国	可5万余戸
奴国	有2万余戸
末盧国	有4千余戸
一支国	有3千許家
对馬国	有千余戸
伊都国	有千余戸
不弥国	有千余家
合計	15万(余)

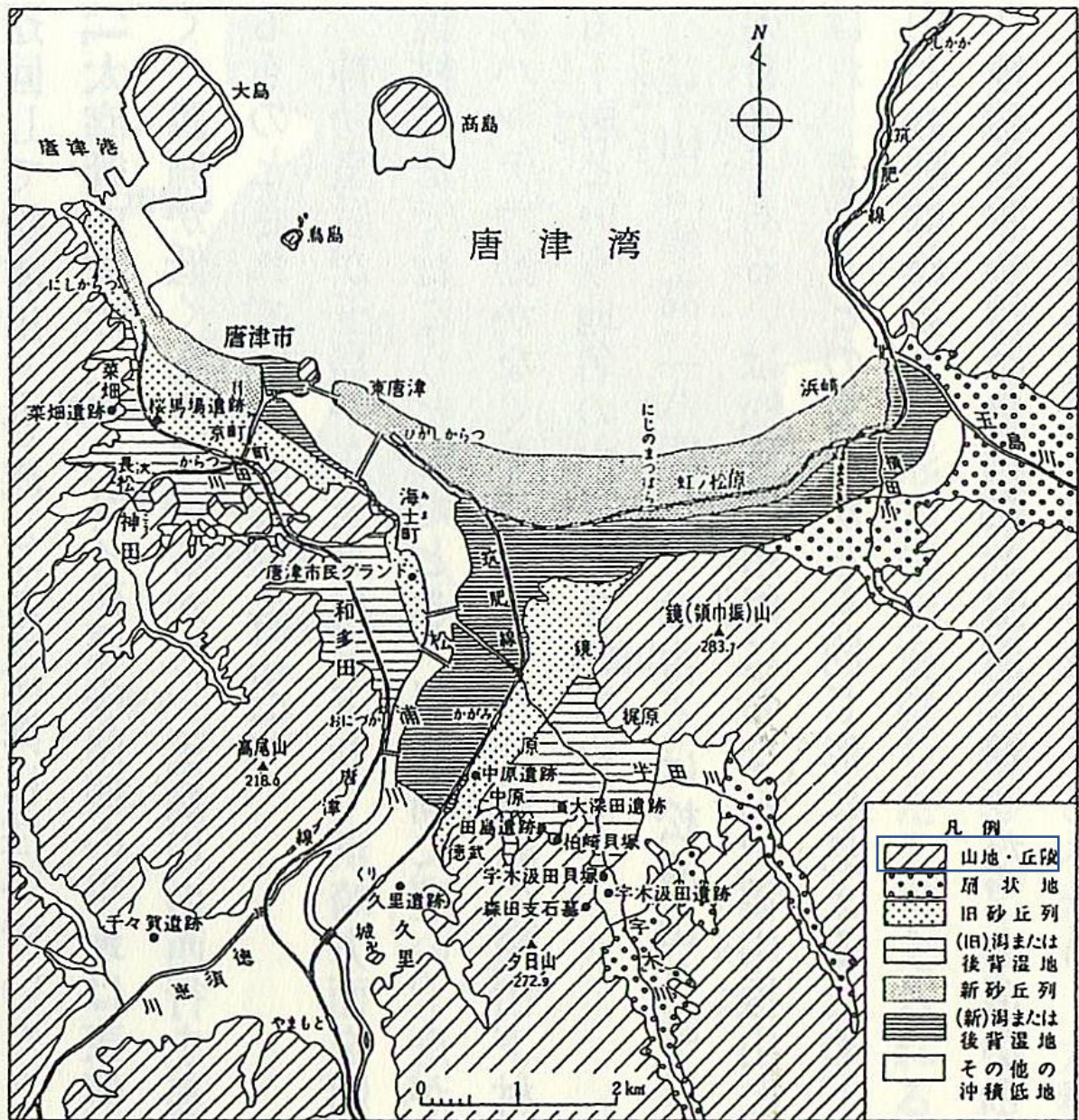
### (2) 「山海に浜(ひん)して居(す)む」

「山が海に迫っているので、沿岸すれすれの所に家を造って住んでいる」と訳されている(『倭国伝』講談社など)。

まさにそのとおりの地形で、弥生時代においては、下図の  山地・丘陵 の区域に人々は暮らしていた。

松浦川や玉島川の河口部には潟地が、海岸部には砂浜が生まれつつあったが、それでも現在と異なり、いまだ平坦地が極端に少なく、古代人は海際の丘陵地に竪穴住居をつくって暮らさざるを得なかったことがわかる。『魏志倭人伝』の描写は、きわめて正確である。





『唐津市史』より

(3)「魚・鰻(ふく・アワビ)を捕らうることを好み、水は深浅となく、皆、沈没して之を取る」

「魚やアワビなどを獲ることが好きで、海の深い浅いを気にせず、人々はみなもぐって獲っている」という意味である(前掲書など)。

唐津の海はいまでもよく魚が獲れるが、邪馬台国時代においても漁業が盛んであったことがはっきりと記されている。男も女も、海女(あま)あるいは海士(あま)として、息をこらえて潜水し、銚などを使って魚を獲り、あるいはアワビ、サザエなどの貝類や、テングサなどの海藻類を採取していたであろう。

#### (4)卑狗と卑奴母離の欠落

ところで、対馬と壱岐でみられた卑狗と卑奴母離のことである。

前号で述べたように、卑狗＝日子＝彦、卑奴母離＝日守で、邪馬台国から派遣された政治・軍事・祭祀等をつかさどる長官と次官とみているが、末盧国については、どういうわけか『魏志倭人伝』に記載されていない。

邪馬台国から特別の委任を受けて、末盧国の王およびその一族が統治していた可能性もありえようが、末盧国の朝鮮半島への海のゲートウェイとしての重要性に鑑みれば、伊都国に配置された「一大率」が末盧国を直轄統治していた可能性が高いとみるべきであろう。

邪馬台	投馬	不弥	奴	伊都	末盧	一支	対馬	国名
伊支馬	弥弥	多模	兜馬觚	爾支		卑狗	卑狗	官
弥馬升	弥弥那利	卑奴母離	卑奴母離	柄泄渠護觚		卑奴母離	卑奴母離	名
弥馬獲支								
奴佳鞮				一大率				

#### 末盧国の遺跡

奴国の時代でも述べたとおり、末盧国には日本最古級の稲作を中心とした「ムラ」——菜畑遺跡がある。古典的な年代論でいえば、紀元前 4、5 世紀ごろの遺跡である。

衣干(きぬほし)山(162メートル)の南東麓で、1979年(昭和54)に発見され、1980年(昭和55)12月から1981年(昭和56)8月にかけて発掘調査が実施され、1983年(昭和58)に国指定史跡に指定された。

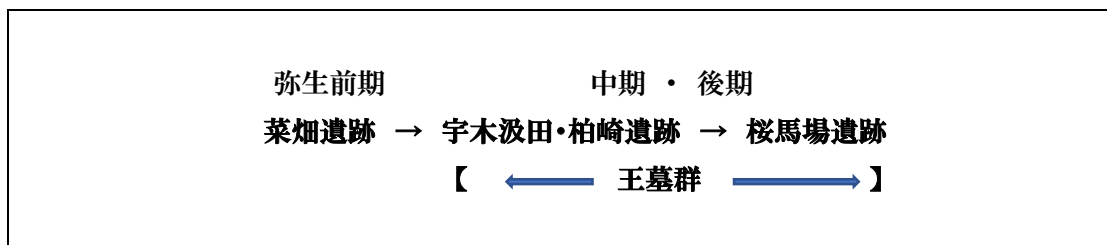
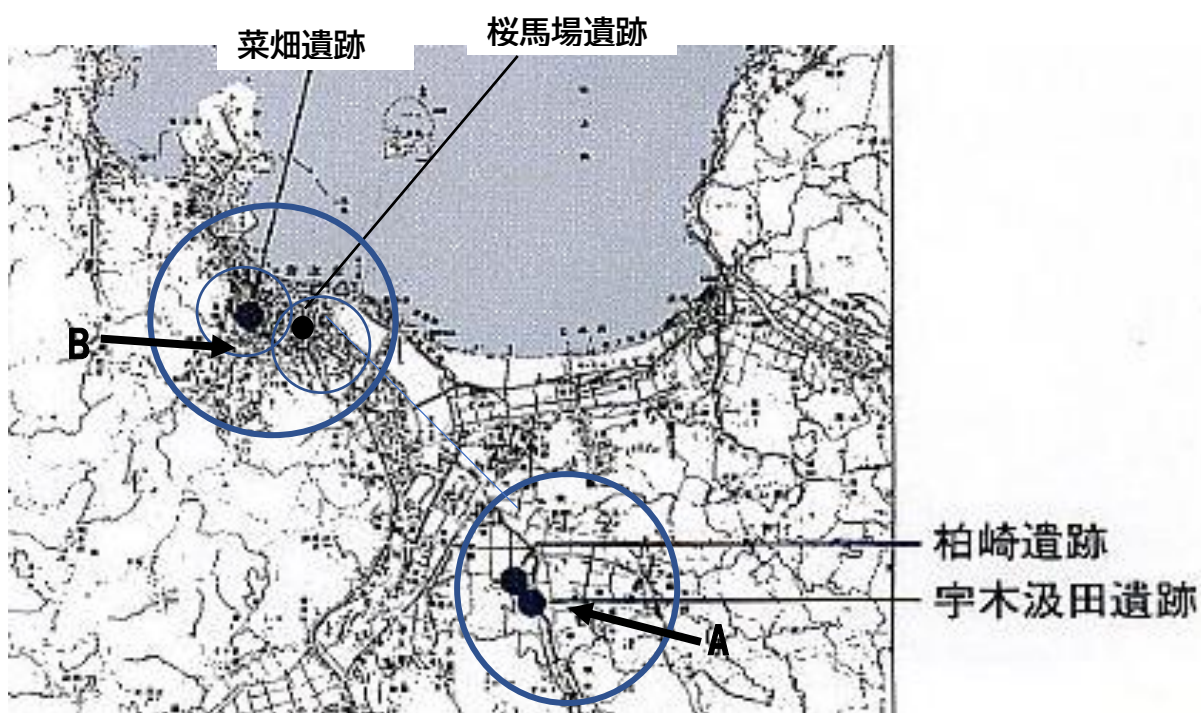
調査によって、縄文時代晩期の日本最古級の稲作を中心にした「ムラ」であることが確認され、遺跡からは多くの炭化米、石包丁、木の鋏や 20～30 平方メートルの水田跡が発掘された。水稻だけでなく、粟、蕎麦、大豆、麦などの穀物やゴボウ、栗、桃なども栽培していたという。また、1989年(平成元)には家畜として豚を飼育していたことも確認され、菜畑遺跡は「日本農業の原点」ともいわれている。

奴国の時代でも述べたように、北部九州における弥生時代は、邪馬台国出現までは奴国を盟主

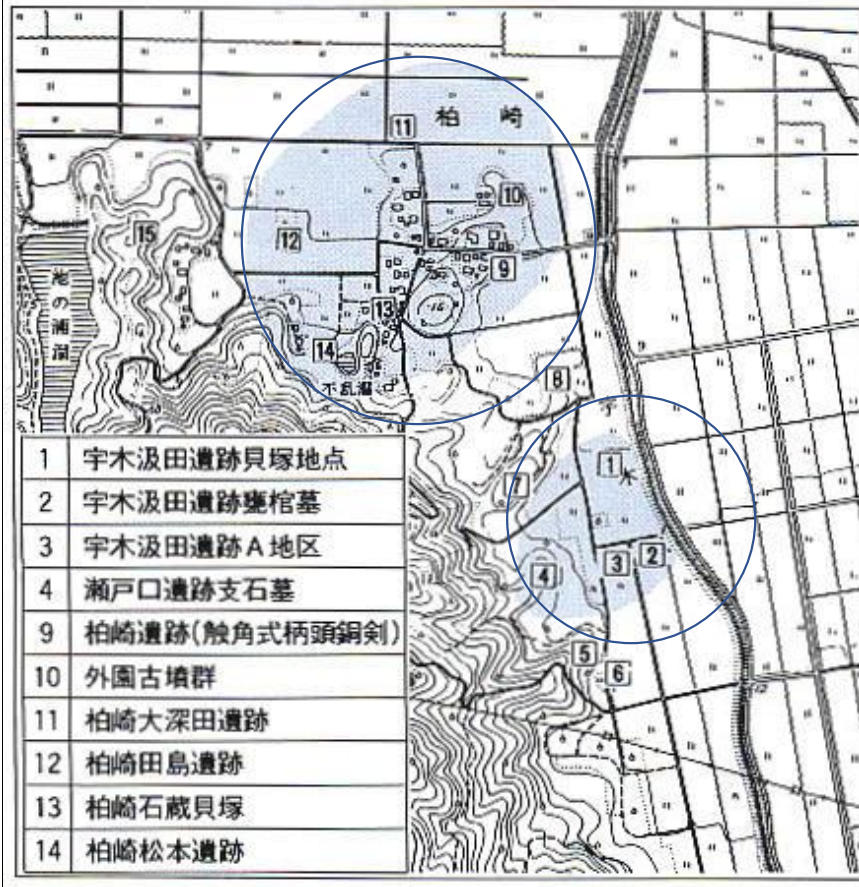
として発展していった。大陸の影響をいち早く受けた末盧国についても、奴国と緊密な相互依存関係にあったことはまちがいない。伊都国などとおなじく、末盧国の王と奴国の王が同族であった可能性も十分にありえよう。

やがて弥生中期に至り、末盧国の王墓群は鏡山の南方——宇木汲田と柏崎あたりに集中的につくられるようになる。

そして、弥生時代後期になると、菜畑遺跡近くの唐津湾沿いの砂丘上に桜馬場遺跡がつくられた。弥生中期の主要遺跡が松浦川東岸に分布する(A)のに対し、弥生後期の末盧国の拠点がこのあたり一帯(B)に移った可能性を示唆している。



柏崎、宇木汲田遺跡周辺地形図 A



		末盧国	伊都国	奴国	早良域	嘉穂域	筑紫野域	朝倉域	佐賀域
前	期 末	菜畑	曲り田	板付田端	↑ 吉武高木				
中	初 頭	↓ 宇木汲田		↓	吉武大石	鎌田原	隈・西小田 第2・3地点	峯	↑ 吉野ヶ里
	中 前				↓				
後	期 後	桜馬場	三雲	↑ 須玖岡本					二塚山
	前 半		井原	↓					↓
後	期 中								
	後 半		平原						

北部九州における弥生時代中期～後期の有力者およびその集団墓（小田富士雄作）



## 平戸島

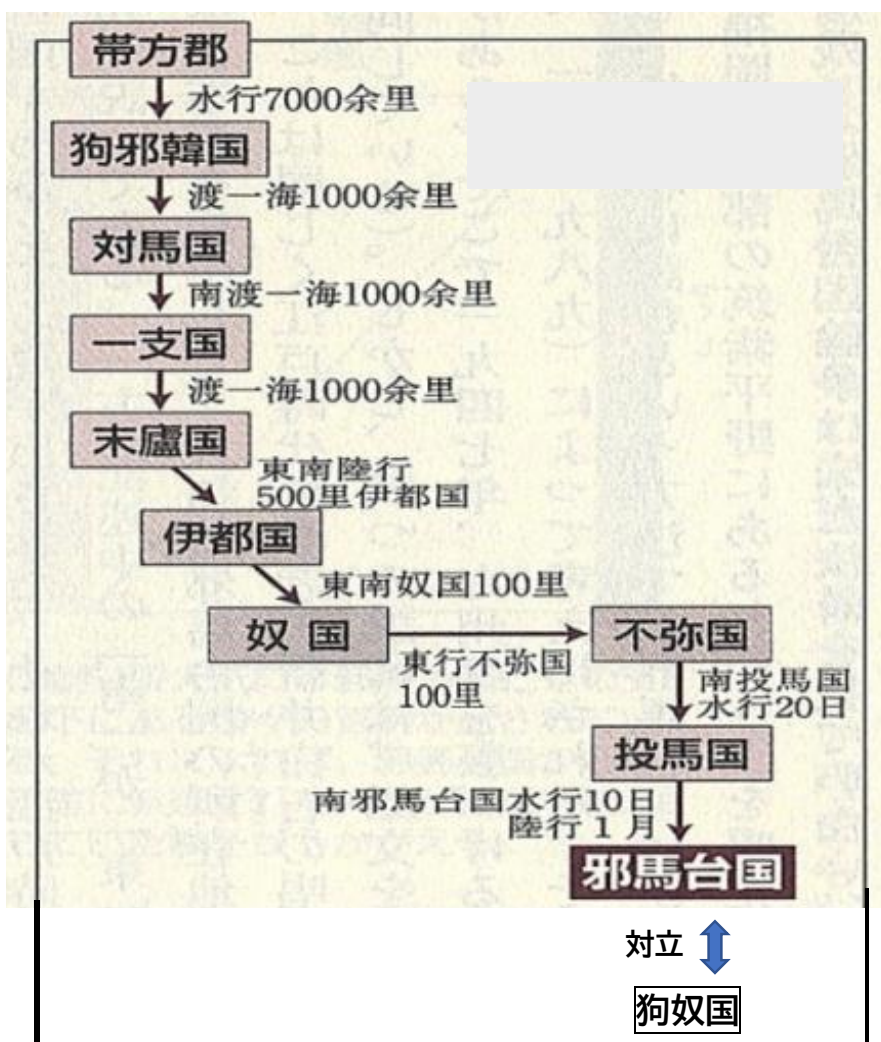
『魏志倭人伝』はつづけて、「(末盧国から)東南に陸行すること五百里にして、伊都国に到る」と書いており、本来ならば帯方郡の役人たちとともに末盧国(唐津市)から東方の伊都国(糸島市)に向かうべきであろうが、その前に末盧国の西南方向の状況について若干述べておきたいとおもう。

古代史を論じるうえできわめて重要な地域でありながら、これまでほとんど見過ごされているからである。

『魏志倭人伝』には、倭国のクニグニが列挙されている。

まず、朝鮮半島から邪馬台国に至る途上にある対馬国、一支国、末盧国、伊都国、奴国、不弥国の6か国と投馬国の計7か国(A)である。邪馬台国を加えれば、8か国となる。

『魏志倭人伝』によれば、「女王国より以北は、その戸数・道里、略載すべきことを得」——すなわち、「これらのクニグニは女王国の北に位置し、その戸数とか距離のおおよそを書くことができる」と書かれており、上記の「基本的なクニグニ」(A)であった。



ところが、『魏志倭人伝』には、「その余(ほか)の旁国(わきのくに)は遠絶して詳かにすることを得ず」——すなわち、「その他のクニグニは遠く離れていて、詳しく知ることができない」としつつ、邪馬台国周辺のクニグニが列挙されている。

斯馬国、己百支国、伊邪国、都支国、彌奴国、好古都国、不呼国、姐奴国、對蘇国、蘇奴国、呼邑国、華奴蘇奴国、鬼国、爲吾国、鬼奴国、邪馬国、躬臣国、巴利国、支惟国、烏奴国、奴国の21か国である。最後の奴国を「基本的なクニグニ」(A)に記載された奴国との重複とみなせば20か国である。

「基本的なクニグニ」(A)に対して、「その他のクニグニ」(B)とよぼう。

これらの「その他のクニグニ」(B)の全体的な考察については別の機会に譲るとして、このなかの「伊邪国」について若干述べてみたい。

季刊「古代史ネット」第8号に塩田泰弘氏の「斯馬国について」の論文が掲載されたが、これは太宰府天満宮で発見された『翰苑(かんえん)』が、郭義恭の『広志』を引用し、

「伊都に届(いた)り、傍ら、斯馬に連なる」

と記したことを検証し、「斯馬国」が糸島市の旧志摩郡であることを結論づけたものであった。

#### **コラム:邪馬台国に関する基本文献**

##### **○陳寿の『魏志』**

『三国志』は陳寿(233?~297)により書かれた。蜀王朝に仕えていたが、265年西晋が起こると、武帝・恵帝に仕え、280年に呉が滅びると、著作郎に転じ、約10年がかりで、魏・蜀・呉の関係史料の収集と編纂に努め、『魏書』30巻、『蜀書』15巻、『呉書』20巻からなる『三国志』を完成させた。『魏志倭人伝』は、『三国志』の『魏書』第30巻の「東夷伝倭人条」の略称である。

##### **○王沈の『魏書』**

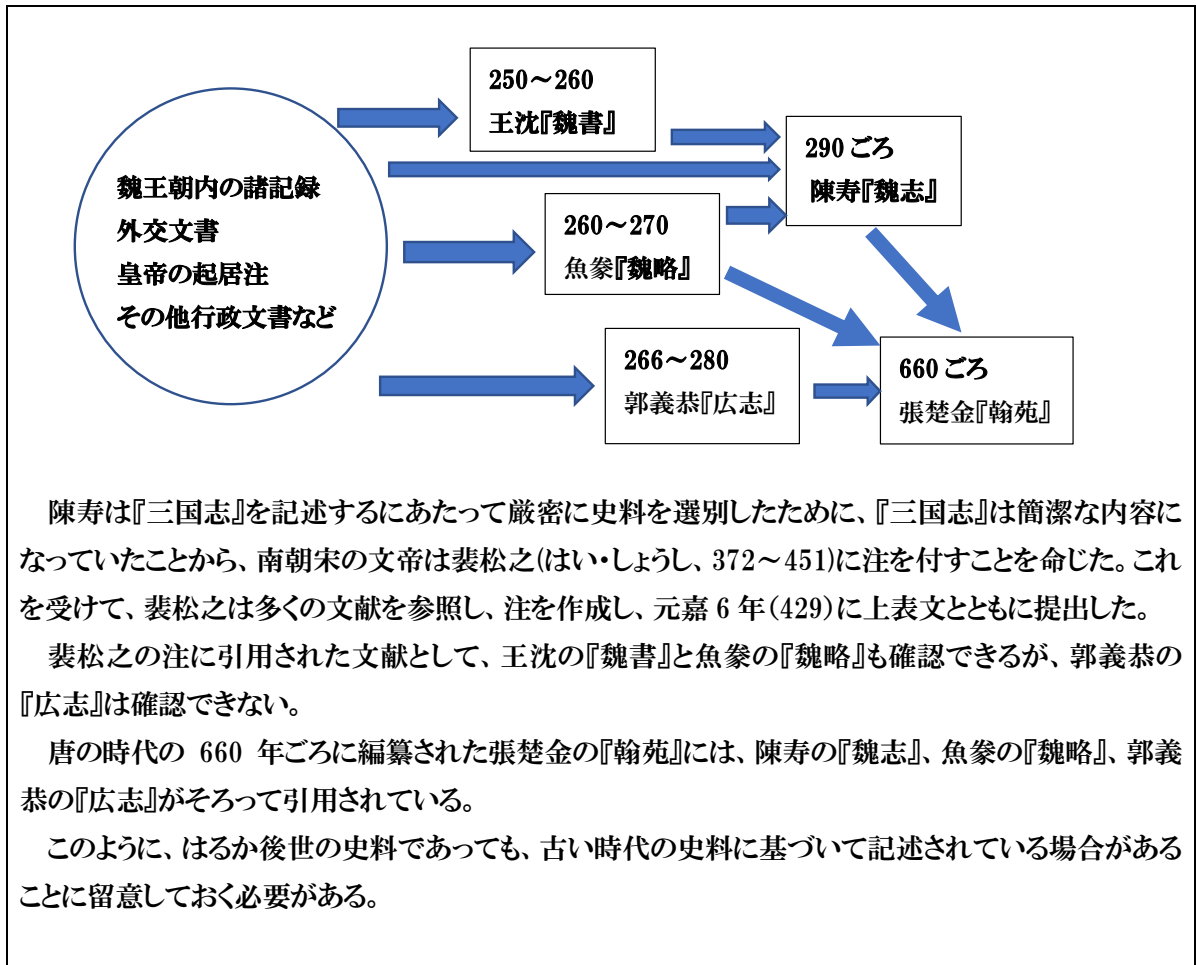
陳寿に先立ち、魏の時代に王沈(おうしん・?~266)が魏の斉王のもとで、荀顛(じゅんがいはい)・阮籍(げんせき)らとともに、250~260年代前半ごろ『魏書』44巻を撰した。王沈の『魏書』と区別するため、陳寿の『魏書』は慣例的に『魏志』と呼ばれる。原典は散逸したが、裴松之の注などに引用されている。

##### **○魚豢の『魏略』**

魚豢(ぎょかん・生没年不詳)が編纂した『魏略』は、魏最後の元帝の記事(261)からみて260年代半ばごろ成立したとみられている。ただし、原典は散逸し、清の時代に王仁俊が逸文を集めて復元を試みたが、はなはだ疎漏であったため、中華民国の張鵬一が1922年に再編している。

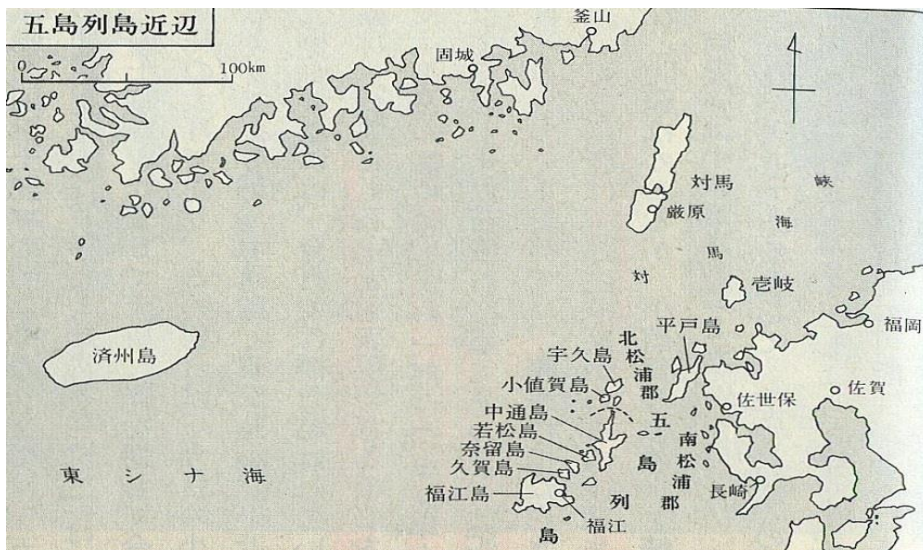
##### **○郭義恭の『広志』**

郭義恭が書いたとされる『広志』は、榎一雄氏によれば266~280年ごろ成立したとされる。博物誌に関する書であるが、邪馬台国への道程なども記され、原典は失われたが、唐時代の張楚金の『翰苑』にも引用されている。



「伊邪国」について、『翰苑』は郭義恭の『広志』を引用して、次のように記している。

「倭の西南に海行すること一日に、伊邪分(いやぶ)国あり。布帛なく、革をもって衣となす。けだし、伊耶(いや)国なり」



末盧国の港(呼子)から船で約 36 キロ西南方向に進むと、平戸島(長崎県平戸市)に到着する。

「平(ひら)」と表記するのは鎌倉以降で、それ以前は「庇羅(ひら)」(『倭名抄』)、「庇良(ひら)」(『日本後記』)などと書かれた。

末盧(マツ・ロ)などとおなじく、朝鮮半島に多くみられる加羅(カ・ラ)や百濟(クダ・ラ)などの末尾「ラ」の国々との共通性がみられることについてはすでに述べたとおりである。

平戸藩主の松浦静山(1760~1841)は、『甲子夜話』のなかで「平戸(庇羅戸)」について、「庇羅の島と肥前の陸地との門(と)」と解したが、島の北西部の呼称とする説もある(『角川地名大辞典』)。

いずれにしろ、「庇羅=庇良=平(ひら)」が島全体の名であったことは確かといえよう。

そして、朝鮮の「加羅(カ・ラ)」と「伽耶(カ・ヤ)」とおなじく、「庇羅(ヒ・ラ)」と「伊耶(イ・ヤ)」の「羅(ラ)」と「耶(ヤ)」は互換関係にあり、かなり近い発音であったとみていい。しかも、末盧国から西南方向に 1 日あれば到達できる距離にある。

「伊耶国」は、平戸島であった可能性がきわめて高いというべきであろう。

### 五島列島

それだけではない。平戸島最南端の志々伎からは、南方海上に宇久島(長崎県佐世保市)と小値賀島(長崎県北松浦郡小値賀町)が見える。平戸は、五島列島の北の玄関口でもあった。

五島列島最大の福江島を中心とする南西の島々を「下五島」(長崎県五島市)、二番目に大きな中通島を中心とする北東の島々を「上五島」(長崎県南松浦郡新上五島町)と呼ぶ。

宇久島と小値賀島は、行政区域は異なるものの、伝統的に五島列島——上五島の一部とみられている。いや、『肥前国風土記』などの記事からみても、平戸島とその北側の的山大島(北松浦郡大島村)なども、古代人にとっては五島列島の一部の島々という認識であったろう。





志々伎山から見た上五島(宇久島・小値賀島)

『肥前国風土記』の「大家(おおや嶋)」の条には、次のように記されている。

「大家嶋(郡役所の西方にある)。むかし纏向の日代の宮に天の下をお治めになった天皇(景行天皇)が巡幸なされたとき、この村に土蜘蛛がいた。名を大身(おおみ)といった。常に天皇の命令にさからって降伏することを拒んだ。天皇は勅令をもって誅滅した。それ以来、白水郎(あま)がこの島に家をつかって定住した。そういわけで大家郷という」

この大家嶋について定説はないが、的山(あずち)大島(長崎県平戸市)が有力であろう。

松浦郡役所があったとみられる唐津市からみれば、『肥前国風土記』の記事のとおり、真西の方向に位置する。しかも、的山大島はもと「大島」という名で、「あずち」ないし「あづき」はのちの時代に付されたものという(『角川地名大辞典』)。よって、大家嶋から大島、的山大島と変遷したのであろう。

島の南西に的山(あずち)湾があり、遣唐船の寄港地や倭寇の前進基地として利用されるなど、古い時代から近世に至るまで天然の良港として知られていた。

この島に、「大身」という土蜘蛛がいたが、九州に遠征した第12代景行天皇によって滅ぼされた。

後に述べるように、「大身」は「臣(おみ)」の類縁語で、邪馬台国時代に起源を発する名であった可能性がある。



おなじく『肥前国風土記』には、平戸島に拠点を置いた景行天皇が、五島列島方面を討伐したようすが記載されている。

「値嘉(ちか)の郷(郡の西南の海中にある)。烽火台は三か所ある。むかしおなじ天皇(景行天皇)が巡幸なされたとき、志式島の行宮においでになって西の海をご覧になると、海の中に島があつて煙がたくさんたなびいていた。付き人の阿曇連百足(あずみのむらじももたり)に命じて調査させると、島が八十余りもあつて、その中でも二つの島には島ごとに人がいた。第一の島を小近(おぢか)といい、土蜘蛛の大耳が住み、第二の島の名は大近(おおちか)といい、土蜘蛛の垂耳(たりみみ)が住んでいた。その他の島にはみな人はいなかった。そこで百足は大耳らを捕らえて天皇に報告した。天皇は勅して罪を問い、殺させようとした。すると大耳らは頭を地につけて、『大耳らの罪はまさに極刑に当たります。一万回殺されたとして罪が消えるものではありません。もし温情をいただいて生きのびることができるなら、御贄(みにえ)(食糧)をつくりたてまつり、いつまでも御膳にお供えいたします』と述べた。ただちに木の皮で長アワビ、鞭アワビ、短アワビ、陰アワビ、羽割アワビなどの形をしたものをつくって天皇に献上した。そこで天皇は特別に許して放免なされた。さらに、『この島は近くにあるけれども、なお近いように見える。近島というべきである』とおっしゃられた。それで値嘉島という。島には、檳榔(あじまさ)、木蘭(もくらん)、枝子(くちなし)、木蓮子(いたび)、黒葛(つづら)、なよたけ、篠、木綿(ゆう)、荷(はちす)、菟(ひゆ)がある。海には、アワビ、ウミニナ、鯛、鯖やいろいろな魚、海藻、海松(みる)やいろいろな海藻がある。そこの白水郎(あま)たちは馬や牛に富んでいる。一方には百余りの近い島があり、他方には八十余りの近い島がある。西に船を停泊させる港が二か所ある(一つは相子田の泊といい、二十余りの小船が停泊することができる。もう一つは川原の浦といい、十余りの大船が停泊することができる)。遣唐使はこの船から出発し、美禰良久(みねらく)の埼(川原の浦西の埼である)に到り、ここから船出して西をさして渡る。この島の白水郎(あま)は容貌が隼人に似ていて、つねに騎に乗って弓を射ることを好み、その言語は世人とちがっている」

景行天皇は、平戸島最南端の「志式島の行宮」を拠点にしている。

この地には十城別命を主祭神とする志々伎神社があり、志々伎山(347メートル)山頂の「上つ宮」、中腹の「中つ宮」、山麓の「辺つ宮」(地の宮、宮ノ浦)、志々伎湾内の「沖つ宮」(沖ノ島)という四宮で構成されている。景行天皇の「志式島の行宮」が置かれたのは、辺つ宮(地の宮)の地といわれている。

阿曇連百足とは、博多湾にある志賀島を拠点とする海人族である。

阿曇連百足が偵察に赴いたのは、小近と大近という二つの島であった。

小近(小値賀)は上五島、大近(大値賀)は下五島をさすと考えられているが(『小値賀郷土誌』)、小近(小値賀)を宇久島のみとする説(『大日本地名辞書』)、中通島・若松島などを含める説(『五島編年史』)などもある。



小近(おちか)には「大耳」、大近(おおちか)には「垂耳」という二人の土蜘蛛がいた。

これまた、『魏志倭人伝』には、邪馬台国時代の「投馬国」の官職として「弥弥(耳)」と「弥弥那利(耳成あるいは耳垂)」が記されている。

『日本書紀』によれば、景行天皇時代の九州東部の豊前地方にも、宇佐の川上の「鼻垂(はなたり)」と御木の川上の「耳垂」がいたとされている。

九州西端部の五島列島の「大身」「大耳」と「垂耳」も、邪馬台国時代に由源をもつ古い官職名が、4世紀後半の景行天皇の時代においても、氏族名として残存していたのであろう。

『魏志倭人伝』	投馬(豊?)国	弥弥(耳) 弥弥那利 (耳成・耳垂)	卑弥呼の時代 (2世紀)
『日本書紀』	宇佐の川上(豊前)	鼻垂	景行天皇の時代 (4世紀後半)
	御木の川上(豊前・山国川)	耳垂	
『肥前国風土記』	大家嶋【的山(あずち)大島】	大身(臣)	
	小近(小値賀) 【上五島(中通島・若松島)・宇久島・小値嘉島】	大耳	
	大近(大値賀) 【下五島(福江島・久賀島・奈留島)】	垂耳	

最後に、『肥前国風土記』は、奇妙なことを記している。

「この島の白水郎(あま)は容貌が隼人に似ていて、つねに騎に乗って弓を射ることを好み、その

言語は世人とちがっている」

五島列島の海人の容貌は九州南部を拠点とする隼人に似ており、しかも騎馬の風習をもち、言語も通常の日本語と異なるというのである。

『魏志倭人伝』には、倭国に「牛馬なし」と書かれ、日本における牛と馬の普及は、古墳時代前期末頃(四世紀末)というのが一般的な見解とされているなかで、福江市の大浜遺跡から弥生時代中期の牛の歯が出土し、古墳時代以前において、すでに五島列島において牛が飼育されていたことが明らかになった。

したがって『魏志倭人伝』の記事は若干事実と反することになるわけであるが、【薩摩—五島列島—済州島・壹岐・対馬】という対馬海流を介した独自の交流を考慮すべきかもしれない。

いずれにしろ、大和朝廷は隼人が言語風俗面で倭人と大いに異なるところから、「夷人雑類」に分類するなど、異民族の一種として取り扱っている。

五島列島と薩摩との交流は、予想以上に密接であった可能性がある。

『肥前国風土記』の記事を立証するものが、五島列島から出土している。

小値嘉島のすぐ近くに黒島という小さな島があり、その島に約三十基の古墳からなる「神ノ崎古墳群」がある。これらの古墳は鹿児島県や熊本県の薩摩隼人の領域に特有の「地下式板石積石室墓」であった。しかもこの遺跡は弥生時代中期から古墳時代後期までつづいている。



6. 神ノ崎遺跡第28号板石積石室墓

小値嘉島からは五島列島で出土している須恵器のほとんどが集中して出土しており、弥生時代から古墳時代にかけて、この島に五島列島の中心的勢力が存在していた可能性が高い。



## 男女群島

福江島の南端から約 65 キロ南西方向に男女群島(だんじょぐんとう・長崎県五島市)がある。

東シナ海に浮かぶ小さな島々で、総面積 4.75 平方キロ、最高地点 283 メートル。

男島(おしま)・クロキ島・寄島(中ノ島)・ハナグリ島・女島(めしま)の五つの島とそれに伴う岩礁からなる。男島の北端から女島の南端まで 9.7 キロ。



ザナギとイザナミの国産み神話では、まず大八島を産み、続いて六つの島を産んでいるが、そのなかの知訶島(ちかのしま)が五島列島、両児島(ふたごのしま)が男女群島に比定されている。

1	吉備児島(きびのこじま)	児島半島(岡山県)
2	小豆島(あずきじま) 別名は大野手比売(おおぬてひめ)	小豆島(香川県)
3	大島(おおしま) 別名は大多麻流別(おおたまるわけ)	屋代島(周防大島)
④	女島(ひめじま) 別名は天一根(あめのひとつね)	姫島(大分県)
⑤	知訶島(ちかのしま) 別名は天之忍男(あめのおしお)	五島列島(長崎県)
⑥	両児島(ふたごのしま) 別名は天両屋(あめのふたや)	男女群島(長崎県)

大八島のうち、九州では九州本島の白日別(しらひわけ・筑紫) や豊日別(とよひわけ・豊前豊後)など4ブロックと、伊伎島(壱岐)と津島(対馬)が登場する。

しかしながら、九州本土では大隅・薩摩が欠け、島では鹿児島県の奄美大島・屋久島・種子島・徳之島などの島々や沖縄など南西諸島が欠け、福岡・佐賀県の玄界灘の島々や熊本県の天草なども欠けているにもかかわらず、男女群島という小さな島々があえて記載されたのは、古い時代から、九州の最も西に位置する島としてよく知られていたからであろう。

奈良・平安時代には遣唐使船の目印の島あるいは寄港地としてもよく知られ、中世には海外貿易の中継地として利用され、松浦党の根拠地ともされた。

江戸時代には福江藩に属し、漁場として栄え、九州各地や四国などからも多くの漁船が集まった。

明治以降はサンゴ漁の島として知られるようになり、全国から仲買人が島を訪れ、あるいは外国人も参加し、島に居住するイタリアの仲買人もいたほどである。

しかしながら、太平洋戦争の激化により、全島民および女島灯台職員などに退去命令が出され、戦後になって帰島したものの、現在では完全な無人島と化し、海上保安庁の巡視船が近海をパトロールするのみである。

## 濟州島

この際、濟州島についても述べておきたい。

濟州島はもちろん韓国領であるが、五島列島から北西方向、約 180 キロメートルの距離にある 1,845 平方キロの火山島である。日本で最も大きい沖縄本島の面積が 1,199 平方キロであるから、その大きさがわかるであろう。

緯度的にみれば、福岡県と高知県などと同じで、しかも対馬海流が流れているため、島の北側

はともかく、島の南部は冬でも温暖な気候である。

古代の文献には、「耽羅(たむら)」という国名で登場する。前にも述べたように、「ラ」文化圏に属する。

『魏志』韓伝では「州胡(しゅうこ)」として出てくる。

「また州胡ありて馬韓の西海中の大島上にあり。その人差(やや)は短小にして、言語は韓と同じからず。皆、髡頭(こんとう)すること鮮卑のごとし。ただ韋(い)を衣(き)て、牛及び猪(ちよ)を養うを好む。その衣は上ありて下なく、ほぼ裸勢(らせい)のごとし。船に乗じて往き来し、韓中に市売す」

——州胡国は馬韓の西の海上の大きな島にある。その人は背がやや低く、言葉は韓族と同じでない。みな鮮卑族のように坊主頭になっている。ただし、なめした革を着て、好んで牛と豚を飼っている。その衣服は上部があって下部がなく、ほとんど裸のようである。船を使って往き来し、韓国中で貿易をしている。

まとめれば、次のとおりとなる。

- ① 背がやや低い。
- ② 言葉が韓族と異なる。
- ③ 坊主頭
- ④ 革の衣を着ている。
- ⑤ 牛と豚を飼う。
- ⑥ 衣服は上だけ。下はない。ほとんど裸のよう。(ふんどし?)
- ⑦ 韓国で貿易をしている。

平戸島のこととおもわれる「伊邪国」について、『翰苑』が次のように記していたことを想起された。

「倭の西南に海行すること一日に、伊邪分(いやぶ)国あり。布帛なく、革をもって衣となす。けだし、伊耶(いや)国なり」

倭国の伊邪国＝平戸島の島民は、済州島とおなじく革の衣を着ている。

しかも、前述したように、福江市の大浜遺跡からは弥生時代中期の牛の歯が出土し、紀元前後から、すでに五島列島において牛が飼育されていたことも判明している。

このことは、五島列島と済州島をつなぐ対馬海流を介した独自の交流があったことをしめしている。

「衣服は上だけ。ほとんど裸のよう」という風俗は、きわめて南方的で、これまた倭人とのつながりを強く感じさせる。

船で朝鮮半島に渡って貿易を行う姿は、対馬と壱岐の「船に乗りて、南北に市糶(してき)す」という姿とも重なる。

『魏志』韓伝によれば、朝鮮語とは別系統の言語であったとされるが、ロシア出身でアメリカの日本文献学者として知られたアレキサンダー・ポピン氏(1961～2022)は、「耽羅」は日本語の「たにむら(谷村)」や「たみむら(民村)」で、朝鮮語が支配言語になる 15 世紀以前の済州島においては、

日本語系の言語が使われていたと推測した。

前述したように、【薩摩—五島列島—濟州島・壹岐・対馬】という対馬海流を介した独自の交流に着目すれば、耽羅(濟州島)が、倭系の言語・風俗・文化の影響を大きく受けていた可能性はきわめて大きいというべきであろう。

このことを裏づける記事が朝鮮の国史である『高麗史』に載せられている。「三姓神話」と呼ばれるものである。

「古記に云う。厥初(けっしょ)には人物なし。三神人地より湧出せり。今鎮山の北麓に穴あり。毛興といふ。これその地なり。長を良乙那といひ、次を高乙那といひ、三を夫乙那といひ。三人荒僻に遊獵し、皮衣肉食せり。一日紫泥にて封蔵せり木函傑の浮かびて東海濱に至れるを見て、就てこれを開きしに、函内に石函あり。一紅帯紫衣の使者随つて来るあり。石函を開きしに青衣の処女三と諸駒犢、五穀の種とあり。すなわち曰く『我はこれ日本国使なり。わが王この三女を生み云う。西海の中嶽に神子三人降してまさに国を開かんと欲して配匹なしと。ここにおいて臣に命じて三女に侍してもつて来たらしむ。よろしく配となしてもつて大業を成すべし』と。使者たちまち雲に乗じて去る。三人歳次をもつてこれを分娶し、泉の甘くて土の肥える処に就きて、矢を射て地をトせり。良乙那の所居を第一徒といひ、高乙那の所居を第二徒といひ、夫乙那の所居を第三徒といひ。五穀を始めて播き、かつ駒犢を牧し、日に富庶に就けり」



「古い記録によれば、当初は無人の島であったが、三人の神人が地中から現れた。今鎮山の北麓に穴があり、毛興というのがその地である(「三姓穴」)。長男を良乙那といひ、次男を高乙那といひ、三男を夫乙那といひ。三人は荒野で狩獵し、皮の衣を着て、肉食した。

ある日、紫の泥で封をした木の箱が浮かんで、島の東海岸に流れ着いたので、それを開いたところ、箱のなかに石の箱があり、赤い帯と紫の衣を着た一人の女性が随行していた。その石の箱を

開いたところ、青い衣を着た三人の乙女が現れ、子馬と子牛、五穀の種を持っていた。

使者の女性は、『三人は日本国王の娘で、西海の島で三人の神の子が国を開こうとしているが、配偶者がいない。そのため臣下の私に命じられ、三人の王女に随行してやってきた。この三人の乙女を后にして、国を開くという大業を成し遂げなさい』といて、たちまち雲に乗って立ち去った。

三人の神人は、それぞれ三人の乙女と結婚して、泉が湧き、土の肥えた場所かどうか、矢を射て占いを行って選んだ。長男の良乙那が選んだ場所を第一徒といい、次男の高乙那が選んだ場所を第二徒といい、三男の夫乙那が選んだ場所を第三徒といった。五穀の種をはじめて播き、子馬と子牛を放牧すると、たちまち国が豊かになった」

まとめると、次のとおりとなる。

- ① 三人の酋長がいた。
- ② 狩獵を行い、革の衣を着て、肉食をしていた。
- ③ 木の箱のような船が流れ着いた。
- ④ 随行の女性と日本国王の三人の王女であった。
- ⑤ 彼らは、子馬と子牛、五穀の種を持参した。
- ⑥ 三人の乙女は三人の酋長と結婚して国を開いた。
- ⑦ 三人の乙女がもたらした農業と牛と馬の放牧によって国が豊かになった。

なお、『高麗史』は「日本」と明確に記しているが、『耽羅紀年』には「碧浪国」あるいは「東海碧浪国」とある。『瀛州(えいしゅう)誌』も「東海上碧浪国」と記している。

濟州島から東方といえば、五島列島の方角である。その東方には末盧国、伊都国、奴国など北部九州のクニグニが控えている。

奴国の時代で述べたように、紀元前後の北部九州の盟主は奴国であった。濟州島を訪れた三人の乙女の出身地の第一候補は、奴国とみるべきであろうが、五島列島の出身であった可能性も十分にあり得よう。

いずれにしても、創世期の耽羅(濟州島)に倭人が大きく関与していることは疑いない。

本来ならば末盧国(唐津市)から伊都国(糸島市)へ向かうべきところ、西南方向へ大きく回り道をしてしまったが、対馬海流に沿った西海の島々が、古代史を論じるうえできわめて重要な地域であることを、あらためて認識いただいたものと確信している。

(つづく)